ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

X－2

1983.3

滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

X－2

1983．3

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県下のほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、はや10年目を迎えることになりました。この間ほ場整備事業の拡大に伴い発掘調査件数も年々増加をしてきました。

このような状況のもとで発掘調査と開発事業との間で大きな問題が生じることなく発掘調査が円滑に実施出来ておることは関係機関の御理解の賜ものと感謝いたします。

発掘調査で得られた資料や成果を公開し、広く県民に資料提供するため、ここに昭和57年度に実施しました発掘調査の報告書を刊行することにいたしました。

この報告書が、滋賀の埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助になれば幸いであります。

最後にこの調査に御協力をいただきました地元関係者および関係諸機関の方々に対し厚くお礼申し上げます。

昭和58年3月

滋賀県教育委員会事務局
文化部文化財保護課長
外　池　忠　雄

例　　言

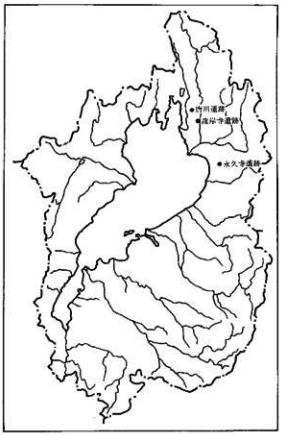
1．本報告書は湖北地区における昭和57年度県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財事前調査の成果である。

2．調査は滋賀県農林部耕地建設課の依頼により、滋賀県教育委員会の指導のもとに財団法人滋賀県文化財保護協会が実施したものである。

3．本書には長浜市永久寺遺跡、伊香郡高月町唐川遺跡・渡岸寺遺跡の３遺跡を収載した。

4．現地調査や整理作業等に御協力を頂いた調査員・調査補助員等の関係者は各本文中に記載した。

5．調査・整理及び報告は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師　田中勝弘（永久寺遺跡）・用田政晴（唐川遺跡・渡岸寺遺跡）が担当した。



目　　次

Ⅰ　長浜市永久寺遺跡

1．はじめに …… 1

2．調査の経過 …… 1

3．調査の結果 …… 3

4．遺　　物 …… 4

5．おわりに …… 6

(図版)

Ⅱ　伊香郡高月町唐川遺跡

1．はじめに …… 9

2．遺跡の位置と環境…… 9

3．調査の概要－遺構と遺物－ ……10

(1)　北陸自動車道東側地区 ……10

(2)　Ⅶ　区 ……11

(3)　Ⅹ　区 ……13

4．まとめにかえて ……18

(図版)

Ⅲ　伊香郡高月町渡岸寺遺跡

1．はじめに ……19

2．遺跡の位置と環境……19

3．調査の概要－遺構と遺物－

(1)　Ⅰ　区 ……21

(2)　Ⅱ　区 ……24

(3)　Ⅲ　区 ……30

4．まとめにかえて ……31

(図版)

図版目次

Ⅰ　永久寺遺跡

図版一　上　調査位置全景

下　tr 27全景

上　tr 27西半分

下　tr 27東半分

図版三　出土遺物

Ⅱ　唐川遺跡

図版一　遺跡遠景（北より）・北陸自動車道東側トレンチ

図版二　Ⅶ区西半トレンチ・Ⅶ区東半遺構検出状況

図版三　Ⅶ区 BP 1遺構検出状況・Ⅶ区 BP 1発掘状況

図版四　Ⅶ区 BP 3発掘状況・Ⅶ区全景（東より）

図版五　Ⅹ区遺構検出状況（東より）・Ⅹ区遺構検出状況（西より）

図版六　Ⅹ区Ｈ１（南より）・Ⅹ区Ｈ１（北より）

図版七　Ⅹ区Ｄ１土器出土状況(1)・Ⅹ区Ｄ１検出状況(2)

図版八　Ⅹ区Ｄ１土器出土状況(3)・Ⅶ区出土遺物

図版九　Ⅹ区出土遺物(1)・Ⅹ区出土遺物(2)

Ⅲ　渡岸寺遺跡

図版一　遺跡近景（東より）・Ⅰ区全景（南より）

図版二　Ⅰ区Ｈ１・Ⅰ区Ｈ２

図版三　Ⅰ区Ｈ２カマド付近・Ⅰ区Ｐ１土器出土状況

図版四　Ⅱ区Ｔ３－Ｈ１・Ｂ１（南より）・Ⅱ区Ｔ３－Ｈ１・Ｂ１（北より）

図版五　Ⅱ区Ｔ３－Ｈ１－ＢＰ１・Ⅱ区Ｔ３西半（南東より）

図版六　Ⅱ区Ｔ３（西より）・Ⅱ区Ｔ３－Ｐ17

図版七　Ⅱ区Ｔ３－Ｄ２土器出土状況

図版八　Ⅲ区Ｔ６（南より）・Ⅲ区Ｔ６（北より）

図版九　Ⅲ区Ｔ６根固め石

図版十　(1)Ⅰ区Ｈ１出土遺物　(2)Ⅰ区Ｈ２出土遺物　(3)Ⅰ区Ｈ４出土遺物

(4)Ⅰ区Ｐ１出土遺物　(5)Ⅰ区Ⅹ１出土遺物

図版十一　Ⅰ区Ｈ２出土遺物・Ⅰ区Ｘ１－ＢＰ１出土遺物
図版十二　Ⅱ区Ｔ１出土遺物・Ⅱ区Ｔ２－Ｄ２埋土出土遺物
図版十三　Ⅱ区Ｔ３－Ｈ１出土遺物・Ⅱ区Ｔ３－Ｈ１埋土出土遺物
図版十四　(1)Ⅲ区Ｔ３－Ｐ２出土遺物　(2)Ⅱ区Ｔ３－Ｐ１(左)・Ｐ17(右)出土遺物
(3)Ⅱ区Ｔ３－Ｐ７出土遺物

挿図目次

Ⅰ　永久寺遺跡

第１図　遺跡位置図……2
第２図　トレンチ配置図……3
第３図　トレンチ断面土層柱状図……4
第４図　出土土器実測図……5

Ⅱ　唐川遺跡

第１図　周辺遺跡分布図……10
第２図　唐川遺跡トレンチ配置図……11
第３図　Ⅶ区東部遺構図……12
第４図　Ⅶ区 BP１出土石製紡錘車（図・写真）……12
第５図　Ⅶ区・Ⅹ区出土遺物……14
第６図　Ⅹ区遺構図……15
第７図　Ⅹ区Ｈ１遺構図……16
第８図　Ⅹ区Ｄ１埋土上面土器出土状況……16
第９図　Ⅹ区Ｐ１……17
第10図　Ⅹ区Ｄ１上面一括出土遺物……17
第11図　Ⅹ区Ｄ１上面出土遺物……18

Ⅲ　渡岸寺遺跡

第１図　遺跡位置図……20
第２図　周辺小字名……21
第３図　渡岸寺遺跡発掘トレンチ配置図……22
第４図　Ⅰ区Ｔ４遺構図……23
第５図　Ｈ２カマド……24

第６図　Ⅰ区Ｔ４出土遺物……24
第７図　Ⅱ区Ｔ１西部遺構図……25
第８図　Ⅱ区Ｔ１出土遺物……25
第９図　Ⅱ区Ｔ２遺構図……26
第10図　Ⅱ区Ｔ３遺構図……27
第11図　Ⅱ区Ｔ２・Ｔ３出土遺物……28
第12図　Ⅱ区Ｔ３－Ｈ１出土遺物……29
第13図　Ⅲ区Ｔ１・Ｔ２出土遺物……30
第14図　Ⅲ区Ｔ６遺構図……31
第15図　Ⅲ区Ｔ５・Ｔ６出土遺物……32

I 長浜市永久寺遺跡

Ⅰ　長浜市永久寺遺跡

1．はじめに(図1)

永久寺遺跡は、長浜市永久寺町に所在する。かつて、集落の北東部を中心に弥生時代の遺物が出土し、西方の大辰已遺跡とともに、弥生時代の集落跡として周知されていた。その後、集落周辺の畑地を中心に、須恵器や灰釉陶器等の散布していることが確認され、前年度に実施した同じ県営ほ場整備事業に伴う発掘調査では、集落の南東約500m程の所で、弥生時代後期後半の土器類や木製品、自然遺物等を包含する溝状遺構が検出された。従って、遺跡は、集落の北東部だけではなく、集落内を含んだ四周に及ぶ可能性が極めて高かくなり、時期的にも、弥生時代から平安時代にまで広がることが知られるようになった。しかるに、昭和57年度に、前年度の継続として、集落の南及び南東部がほ場整備の対象地域となり、事前に発掘調査を実施する必要性が生じた。

調査は、文化財保護課が県農林部耕地建設課より予算（1,600,000円）の再配分を受け、財団法人　滋賀県文化財保護協会（理事長代理　辻　　清）へ委託して実施した。調査の体制は次の通りである。

調査主体　滋賀県教育委員会

調査機関　（財）滋賀県文化財保護協会

調査指導　滋賀県教育委員会　事務局　文化部　文化財保護課　埋蔵文化財係　技師　田中勝弘

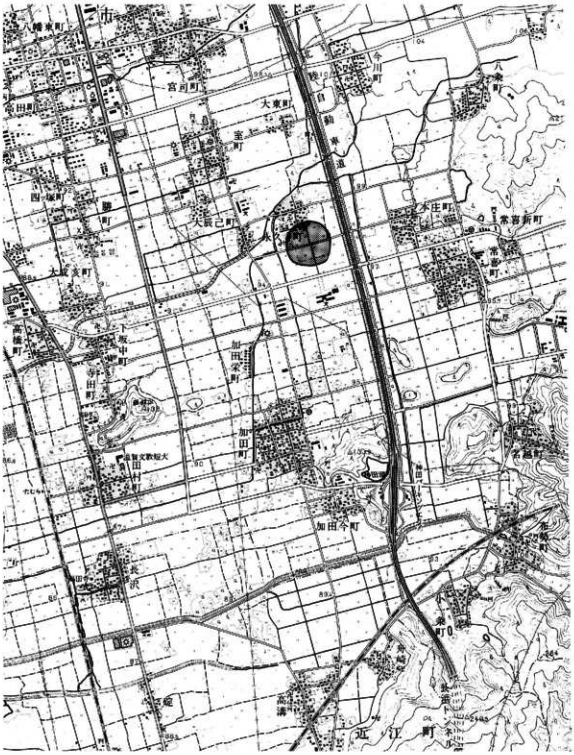
調査員　　（財）滋賀県文化財保護協会嘱託調査員　谷口義介他

この調査にあたっては、長浜市教育委員会をはじめ、地元永久寺町の方々、ほ場整備関係機関の方々にお世話になった。また、武田知久、荻野良博、荻野　始、田辺宏明、吉田秀則の諸氏には、本書の作成にあたり御助力をいただいた。ここに記して謝意を表します。

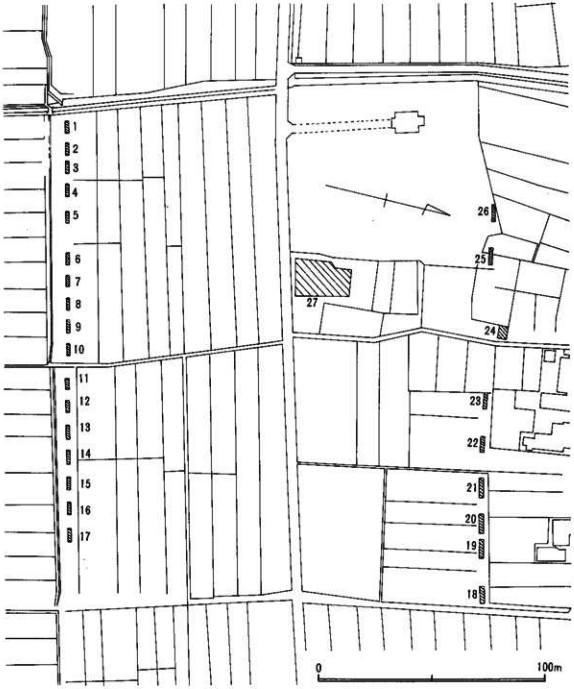
なお、本書は、田中勝弘が執筆し、図版等は上記諸氏の協力により作成した。

2．調査の経過(図2)

調査は、ほ場整備工事による排水路計画部分及び田面の切り下げが予定されている箇所にトレンチを設定し、遺構の有無、遺物包含層の有無等を確認し、工事の遺跡への影響の程度を考慮し、必要に応じてトレンチの拡張を計る方針を持った。特に今回は、集落の南側に位置する八坂神社の東隣、集落と南側で接続する部分が工事範囲に含まれていた。畑地部分は周囲の水田面より一段高く、土師器や灰釉陶器、山茶埴等の遺物が濃密に散布する場所であり、遺構の遺存度も良好であろうと予想された。結果的に、遺構の存在を確認したのであるが、当該する畑地部分は、頭初の水田化計画が変更され、現状のまま畑地として利用されることとなった。工事も地均程度のものであり、遺跡への影響がないものと判断されたので、遺構の存在を確認するのにとどめ、遺構の掘り下を実施せず、その性格等の解明は後世に託した。排水路の計画部分は、神社の南100m程の位置で東西方向に一本、神社の北端を通るもの一本で、計26カ所にトレンチを設定した。必要に応じてトレンチの拡張を計る方針を持っていたが、結果的にはトレンチの拡張はなかった。なお、トレンチは、神社の南側でTr 1～17の17カ所、神社北端を通る部分で、水田の部分にTr 18～23の6カ所、神社北側の社地にTr 24～26



第1図　永久寺遺跡位置図（縮尺 1/25,000）



第２図　永久寺遺跡トレンチ配置図

の３カ所の計26カ所で、畑地部分を含めて27カ所に設定し、発掘した。

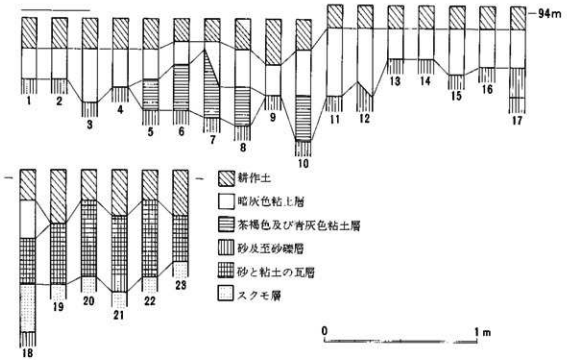
３．調査の結果(図３)

神社の南側の排水路計画部分では、延長200m間で17カ所にトレンチを設定し発掘した。以東の部分については、トレンチ調査の結果から、遺跡の広がりはないものと判断された。この17カ所のトレンチでは、厚さ20

cm前後の耕土下に20～35cmの黒灰色の粘質土が堆積しており、以下は砂層及至砂礫層となっている。部分的に砂層や砂礫層が深い位置にあり、上方に褐色及至青灰色の粘質土の堆積する部分が見られたが、基本的な堆積層位に変化はない。いずれの堆積層位からも遺物の出土は皆無であり、各面での遺構も検出できなかった。

神社北端を通るTr 18～26のうち水田部分に当るTr 18～23では、20～30cmの耕作土下に、30～50cmの厚さで砂と粘質土とが互層になったものが堆積し、以下では、厚さ30cm以上のスモク層（植物腐蝕土層）があって、砂粒層に移行している。やはり、いずれの層位からも遺物、遺構の存在を確認できなかった。

Tr 24～26は神社の北端で、北側の水田面より一段高くなる社地に当る。この部分では、北側の水田面までは後世の盛土で、この堆積土中から若干の土器の細片が出土しているが、盛土除去面で遺構を検出することができなかった。



第３図　永久寺遺跡トレンチ断面七層柱状図

Tr 27は神社東側の畑地に当る。このトレンチでは、表土下70cm程で遺構面に達した。この間に、耕作土、褐色土、灰茶褐色土、暗灰茶褐色土等の４層の堆積土が確認できた。いずれの土層からも土器片が出土するが、いわゆる包含層を形成しているものではなく、水平堆積する状況からも、Tr 24～26と同様、後世の堆積土と考えて良い。この４層を除去した頭初の時点で、土器を含んだ炭化物の集積個所を検出した。この時点で遺構の種類や分布状況を知るためトレンチの拡張を計った。その結果、遺物を含む大型の土拡や構状遺構等を検出し、畑地のほぼ全域に広がることが判明した。この畑地部分は工事による削平がまぬがれたため、調査は、遺構の存在を確認して埋め戻した。

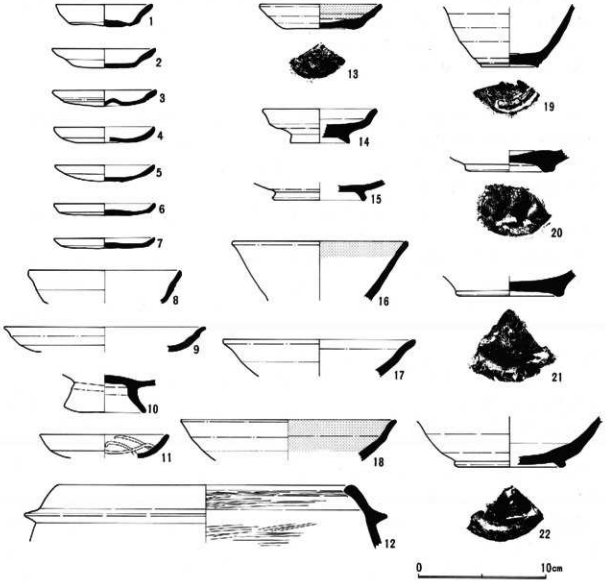
４．遺物(図４)

遺物は土器類で、Tr 27において遺構検出時に出土したもののみである。土師器の埦、皿、羽釜、黒色土器

の埦、灰釉陶器の埦、皿、山茶埦等がある。以下に、これらの主なものについて記述しておく。

i） 土師器

1～7は土師器の小皿で、口径7.1～8.2cm、器高0.8～1.7cmを計るものである。いずれも、口縁部外面を一段ナデし、底部外面を未調整で残し、内面のみナデ調整するものであるが、形態に若干の相違がある。1～3は、底部内面を強くおさえて深かくし、口縁部を長く引き出して外反させるもので、口縁部に段が残る。口径7.1～8.2cm、器高1.3～1.7cmで、比較的深味のあるものとなっている。4・5は、口縁部を内彎気味にナデ調整するもので、口径7.9～8cm、器高1.3cmを計るものである。6・7は4・5と同じ調整方法で、形態上似ているが、器高0.8～0.9cmと浅いものとなっていた。口縁部はナデの範囲のみとなっている。9は復原口径で16cm、高さ1.9cmを計る大型の皿状品である。胎土は細かく、灰白色の色調を持ち、上記小皿と異なる。口縁部外面は二段ナデしており、最初の横ナデから口縁端部附近に移り、外反させながらナデている。



第4図　永久寺遺跡出土土器実測図

8は口径12cm、器高2.1cmに復原できる埦形品である。胎土や色調は小皿と同様である。口縁部の調整は9の大型の皿と同様で二段ナデしているが、口縁端部外面を内傾させるナデ方である。

10は、高さ2cmと高い高台を貼り付けた埦形品である。高台裾部の径は6.5cmを計り、裾開きとなっている。高台の内面はナデ調整が見られるが、外面に指頭痕が残り、未調整である。12は、口径23.5cmを計る羽釜である。大きく内傾する口縁部の端面は丸く、内側に肥厚させている。内面には口縁部を含めて刷毛目調整痕が見られる。

ii)　黒色土器

11の1点のみで、口径10.2cm、器高1.8cm以上に復原できるもので、皿状品である。口縁部外面を横なでし、外底面は未調整のまま残す。内面には暗文を認めることができる。

iii)　灰釉陶器

14は口径9.1cm、器高2.7cmの高台を持つ。口縁部は、底部から稜を取って屈曲させ、外反気味に立ち上らせている。高台は体部直下より内側に付く。内面に弯曲気味の面が見られ、外面はわずかに外側へ開く。器壁に厚味があるが、胎土は精良である。釉は口縁端部にわずかに見られる。

15は、高台部分の破片で、内面が内弯気味で、外面に稜が走る。

22は、底部外面に糸切り痕を残す。

iv)　山茶埦

16～18は口縁部片で、埦形品と思われる。16は直線的な口縁部で、器高は極めて高かくなる。口縁端部附近の内側に釉が見える。17は外反する口縁部で、器壁に厚味がある。18も口縁部は外反し、内面に釉が見える。20～21は皿形品と思われるものの高台部分である。ともに逆台形状の底いもので、外端面にモミ痕が残り、また、外底面に糸切り痕が見られる。

13は、無高台の皿で、口径9.7cm、器高1.9cmのものに復原できる。底部周辺が高台風に厚くなっている。内面に釉が残る。

19は壺形品になるものと思われる。高さ0.2cmの極めて低い高台が付く。高台端面にモミ痕があり、外底面に糸切り痕が見える。

以上が出土土器の主なものである。灰釉陶器の14・15・22のうち14・22は高台内面の弯曲がほとんどなくなっており、外底面に糸切り痕のあるものがあって、愛知県猿投窯跡編年による百代寺窯式に相当するものと考える。15は、高台の内面に弯曲面をわずかに残し、14・22とは一～二形式程古式である。

11・16～21は釉がかりの見られるものもあるが、胎土に砂粒が多く、高台にモミ痕の見られるものがあり、東山105号窯式に相当する山茶埦であろう。

土師器では、1～7の小皿、これと同じ胎土、色調の埦形品の8は少なくとも同じ時期のものであろう。小皿では口縁端部の巻き込みが見られず、平安京跡では、左京四条一坊のSE8出土の「寛治五年五月十三日」の墨書土器と共伴するものの中に端部の巻き込みのあるものが見られところから、小皿の1～7、埦の8は山茶埦の時期に当てることができそうである。高い高台を持つ10は山茶埦と共伴するものであり、黒色土器、羽釜も近似した時期のものと考える。従って、一部11世紀代に入るものが含まれるが、大半が12世紀に入る土器類であるとすることができる。

5．おわりに

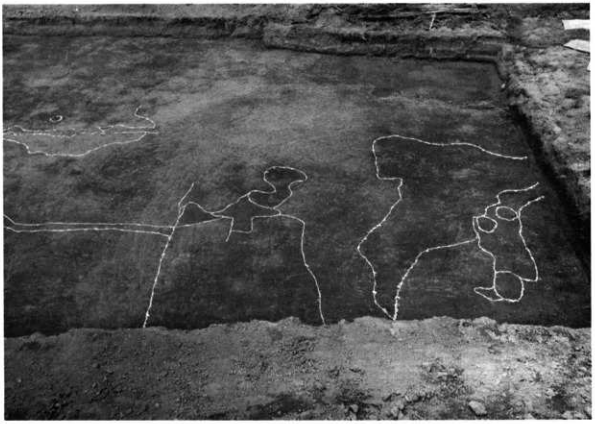
今回の調査では、水田部分で遺構等を検出できなかったが、集落内及びその周辺の畑地では確実に遺構が遺

存していることが知れた。今回の鈎所では平安時代後期に下るものである。遺構の性格の解明までには至らなかったが、その一端を知ることができたこととともに、工事による破壊から守られたことが何よりの成果である。

1　調査位置全景

2　トレンチ27全景

1　トレンチ27西半部



2　トレンチ27東半部

灰釉陶器・山茶埦等

土師器皿

II 伊香郡高月町唐川遺跡

II　伊香郡高月町唐川遺跡

1．はじめに

昭和57年度に計画されていた県営ほ場整備唐川Ⅰ区は、主として北陸自動車道の西側部分にあたり、この事前調査は昭和56年（1981年）10月から昭和57年３月にかけてすでに実施ずみであった。しかし、残る北陸自動車道より東の部分の約６ha及び北陸自動車道の西側部分で新たに計画された２本の排水路部分（Ⅶ区・Ⅹ区）の調査の必要が生じたため、昭和57年度に事前発掘調査を実施することになった。

発掘調査は切土予定のある排水路計画部分を中心に３×５m程度の試掘壙を設け、その結果に基づき発掘区を広げ精査を行うことにした。現地調査は昭和57年（1982年）６月25日から７月末日まで行った。

調査は文化財保護課が農林部耕地建設課より予算の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会へ委託して実施した。調査の体制は次の通りである。

調 査 主 体　滋賀県教育委員会

調 査 機 関　(財)滋賀県文化財保護協会

調 査 指 導　滋賀県教育委員会事務局文化部文化財保護課技師　用田政晴

調査補助員　小竹森直子（岡山大）・萩野　勉（大阪工大）・萩野良博（滋賀大）

本文中の標高は標準海抜高、方位は磁北を示し、竪穴住居跡→H、大形土壙→BP、土壙→P、溝→Dの略号を用いる。

2．遺跡の位置と環境

唐川遺跡は伊香郡高月町大字唐川に所在する。高月町の北部平野の中に標高200mを計る独立丘の湧出山がある。この湧出山南麓に現在の唐川集落があり、中ほどを余呉川の支流の赤川が東西に流れる。遺跡はこの集落の南半から南にかけての水田に広がり、横山集落の近くまで含まれると考えられる（第１図）。

微地形をみると、現在の唐川集落の赤川より南部および横山集落が自然堤防上にのり、その間の水田はやや低地の氾濫原にのるということと、遺物の散布状況、1981年度のほ場整備に伴う調査の結果から、集落跡は現集落とほぼ重復すると考えられる。唐川集落のすぐ北にある湧出山の尾根上には、前方後円墳を含む湧出山古墳群、その南斜面には横穴式石室墳を中心とした唐川古墳群がある。また、横山集落の西には２基の前方後円墳が遺存する。兵主神社古墳は後世の削平により現在では規模等不明だが、横山神社古墳は全長38mを計り前方部を西に向ける。おそらく横穴式石室を内部主体としてもつものだろう。

これまでの調査の所見によると、唐川から横山集落にかけては弥生時代後期中ごろから末にかけての遺物及び一部古墳時代後期の土器片を含みながら、平安時代まで続く集落跡が存在すると思われる。特に横山寄りの田面中では、弥生時代後期末の竪穴住居跡を４軒検出し、平安時代末の掘立柱建物跡も３棟分見つかっている。また横山の西寄りにある保育所の北付近では弥生時代中期にまでさか上ると思われる土器片も採集されている。

第１図　唐川遺跡周辺分布図(地図：大正９年測図)

第１図　周辺遺跡分布図
(○は古墳あるいは古墳群)

1．大青古墳群
2．西山古墳群
3．西山山頂古墳群
4．小山古墳群
5．赤尾古墳群
6．西山古墳
7．磯野古墳群
8．松尾古墳群
9．宮山古墳群
10．西野古墳群
11．古保利古墳群
12．山本山古墳
13．若宮山古墳(前方後円墳)
14．ゴンベ穴古墳
15．尾上溪遺跡
16．尾上遺跡
17．父塚古墳
18．横野遺跡(土師器、須恵器散布)
19．みち塚古墳
20．姫塚古墳(前方後円墳)
21．長塚古墳(前方後円墳？)
22．大将軍塚古墳(前方後円墳？)
23．生塚古墳
24．横山遺跡(弥生土器散布)
25．横山神社古墳(前方後円墳)
26．兵主神社古墳(前方後円墳？)
27．唐川西古墳群
28．唐川北古墳群
29．涌出山古墳群(前方後円墳を含む)
30．唐川古墳群
31．涌出山古墳
32．石作遺跡
33．飄塚古墳(前方後円墳？)
34．飄撃塚古墳(前方後円墳)
35．横蝋塚古墳
36．大海道遺跡
37．井口遺跡
38．華寺遺跡
39．南森遺跡
40．柏原北遺跡
41．柏原遺跡
42．流岸寺遺跡
43．法光寺遺跡

３．調査の概要――遺構と遺物――

（１）　北陸自動車道東側地区

この付近は余呉川・赤川によって形成された下流沖積地にあたり、ほ場整備による田面の切盛りはほとんどなかったため、北陸自動車道より東側部分においても排水路部分のみをとり合えずの調査の対象とした（第２図)。

ここでは３×５ｍの試掘壙を重機によって31個所設けた。北半の試掘壙では25～40㎝の耕土下には茶褐色か灰褐色の砂礫土が広がり、遺物は皆無であった。また南半では耕土下に径２～４㎝程度の比較的小ぶりな礫を多量に含む砂礫土が広がる地域と特に南端では青灰色粘土が厚く堆積しているところがあり、いずれの場合も遺構・遺物は皆無であった。こうしたことは先に北陸自動車道建設に先立って調査が行なわれた南約200ｍに

第２図　唐川遺跡トレンチ配置図

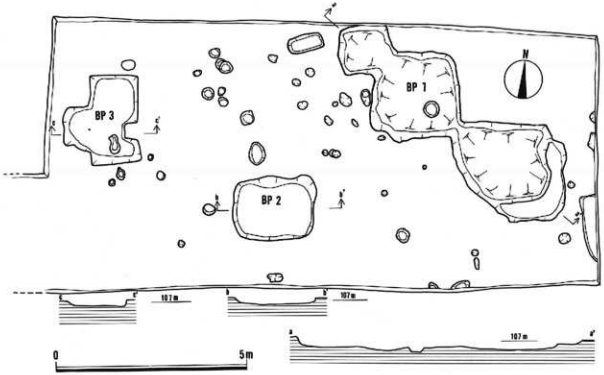
あたる甑塚古墳の周囲の状況に合致し、この地域では北陸自動車道の西側から広がっている微高地及びその縁辺が北陸自動車道を東のおよその境としているようである。

（２）　Ⅶ区

Ⅶ区と称したのは、昭和56年度に調査を実施した、弥生時代後期の竪穴住居４軒と平安時代の掘立柱建物を３棟検出したⅦ区の南約30mの地区を言う（第２図）。

これは横山集落の北縁に接した延長約100m・幅約３mの排水路計画部分にあたり、厚さ30～35cmの耕土を重機によって取り除くと、その西半部においては黄褐色砂礫土が広がる。その面上には土師器片が散在しているが明瞭な遺構は検出されなかった。また東半分においてはピット群と竪穴住居跡に類似する遺構が検出されたため、北に一部調査区域を拡張して精査することにした。

当初、竪穴住居跡かと思われた遺構は平面が不定形に近い方形を３つつないだような形になり、とりあえずBP１と称した。長軸7.5m、幅の広いところでは５m、深いところで0.3mを計り、底はゆるやかに中ほどに向って傾斜するがほぼ平底と呼んでさしつかえない。３つの方形のそれぞれつなぎの部分はやや浅めで、東端にはテラス状にやや浅い張り出しが認められる。３つの方形の真ん中の部分にピットが１個あけられている（第３図）。



第３図　Ⅶ区東部遺構図

Ⅶ区の東半部においては遺構形成土は茶褐色粘質土であり、遺構内埋土は灰色粘質土からなる。従って、一見するとこの近くの遺構検出状況とは対称的な様相を呈する。

BP １の埋土も均一であり須恵器片・土師器片に混じって天目茶垸及び鉄釉壺底部片が見つかり、周囲がかなり攪乱された後埋められたようである。東端の方形部分の北よりからは炭化物が一部検出され、同じ部分の床面近くの埋土中から石製紡錘車が１点出土した（第４図）。

BP １とは平面形が異なり隅丸方形を呈し、東西2.15m・南北1.70m・深さ0.20mを計るものをBP ２、東西1.60m・南北2.40m・深さ0.2～0.3mを計る平面不定方形のものをBP ３と称した。いずれも底は平らで遺物は伴なわなかった。

他に調査区内で径30cm前後、深さも20～40cm程度の小ピット群を検出したが、現在のところ掘立柱建物跡らしい根拠は得られない。

第４図　唐川遺跡Ⅶ区ＢＰ１出土石製紡錘車（図・写真）

なおBP１の南東部分とBP３の西部分で人頭大の角礫が埋土内で検出されたが、これらはいずれも放り込まれたような状況を呈し、これらの大形土壙が極めて短期間に埋められたことを示しているようである。

Ⅶ区では弥生時代の壺１・甕８（受口状口縁７）・甕底部３・高杯１・高杯脚部２・器台１・器台あるいは高杯脚部片２個体分の他、須恵器高杯１・青磁埦１・天目茶埦２・鉄釉壺底部片１・土錘１・梅の種が出土した（第４図・第５図）。

Ⅶ区遺構面から出土したもので図示し得たものは第５図に示した。

１は甕口縁部片で端部はつまみ上げて処理される。内外共横ナデ調整で嗣部内面はヘラ削りのようである。１～３㎜大の石英・赤砂を中心とする砂を多量に含む。外面は灰褐色を呈し、残存は1/8である。

２も甕口縁部片で端部はややふくらみ気味である。１～２㎜大の砂を多量に含む非常に粗い胎土である。内外共乳灰褐色を呈する。

３も甕口縁部片で１と同様に端部は処理される。２㎜以下の砂を多量に含む土で、粗い感じがする。乳茶褐色を呈し、残存1/6である。

４は甕底部片と思われ、外面調整は不明だが、内面はヘラ削りの後にナデているようである。底はわずかに凹気味である。２～５㎜大の砂を含み、外面は灰黄褐色を呈する。

５の甕底部は残存1/3で径は推定である。内面調整は不明だが平滑に仕上げられており、外面はヘラ削りかと思われる。１～２㎜大の砂に５㎜大の小石が混じる胎土で、外面は灰黒色。

６は器台口縁部片と思われるが、残存は1/4で径は推定である。端面はいわゆる擬凹線を５条施し、内面はヘラ磨きかと思われるが明確ではない。端部を補強するように体部とその接合面の下に粘土を足して横ナデを行う。２㎜以下の石英を主とする砂を多量に含む粗い土でできている。外面は灰黄色を呈する。

７・８は高杯脚部片で７は４方向に穿孔するが、２個ずつが比較的近い位置にある。７の外面はヘラ磨きで内面はヘラ削り、８の内面はヘラ削りの後ナデが見られる。８の坏部内面はヘラ磨きかと思われる。共に胎土は１㎜大以下の細砂を含む。色調も共に赤褐色を呈する。

９・10も高杯脚部と思われ、10の外面はヘラ磨き、９もおそらくそのようであり、内面については10はヘラ削りの後ナデているようである。９の脚端部は一部平担面を残そうとしている個所もある。

11は土錘で長さ3.7㎝、幅1.2㎝で重さは3.04ｇである。

12は甕口縁部片で端部はつまみ上げ気味で内外共に横ナデ、胴部内面はヘラ削りのようである。粗い胎土からなり灰黄褐色を呈する。

13は青磁で残存1/12の小片である。端部は若干肥厚気味で濃緑色の釉の厚みは極めて薄い。

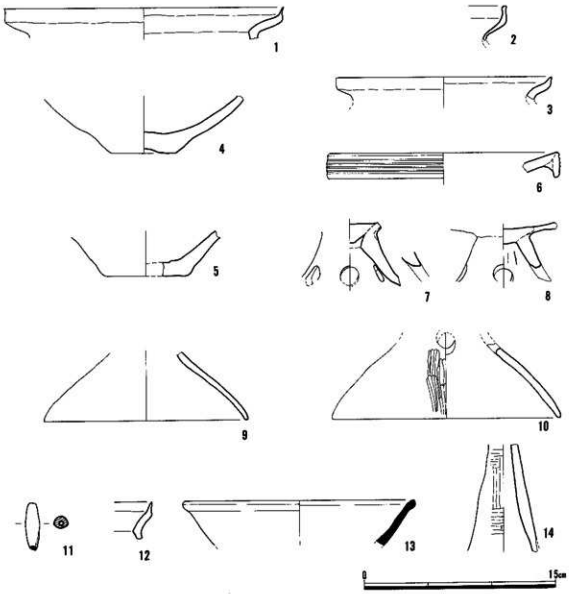
14のみ後述するＸ区Ｈ１埋土内出土で、高杯脚部片である。外面はヘラ磨き後にていねいにナデ消しているようである。

第４図の石製紡錘車は直径4.5㎝・最大厚1.2㎝・重さ34.5ｇの断面は偏平な台形をなす。中央孔の直径は0.7㎝を計る。淡灰緑色を呈し、文様は見られない。一部欠損しており、下面に粗いノミ痕が認められる。全体に擦過痕があり、下面のものは孔へ向けて放射状を呈する。

（３）　Ｘ区

唐川集落の東南部にあたる赤川沿いの耕水路計画部分をＸ区と称した。野神として信仰の対象である一本杉のすぐ西にあたり、長さ47ｍ・幅６ｍにわたって調査区を設定した。

トレンチ中ほどにトレンチに沿って幅30㎝程度の溝が走るが、埋土は耕土であり後世の耕作に伴う溝と思わ



第５図　Ⅷ区・Ⅹ区出土遺物

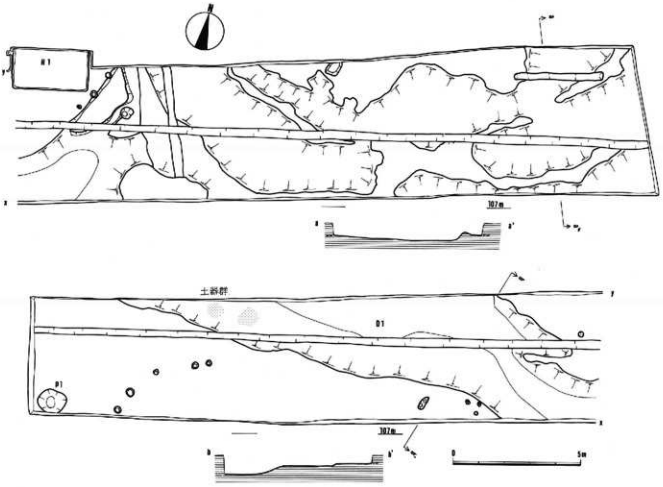
れる。

遺構ののる土層は基本的に淡黄褐色土であり、埋土は淡褐色土からなる。

この調査区では全体に自然流路あるいは沼沢池の様相を呈し、その深さはほぼ30～40cm程度である。調査区中ほどに竪穴住居跡１軒を検出し、この部分は北側に一部拡張した(第６図)。また、西半分における自然流路はとりあえずＤ１と称し、南西隅の東西1.28m・南北約1.10m・深さ0.50mを計る円形の土壙をＰ１と称した。このＰ１の埋土内からも弥生土器片が出土した（第９図)。

西半部のＤ１ではその埋土上層で弥生土器群が一括して出土した（第８図)。しかしその下層では遺物は認められなかった。

なお同じＤ１においても弥生土器一括出土地区のベースは茶褐色砂礫土であるが、やや北よりになるとベースが青灰色粘土で埋土は茶褐色砂質土からなる。



第６図　Ｘ区遺構図

竪穴住居跡Ｈ１は一辺3.05ｍの平面方形を呈する（第７図）。

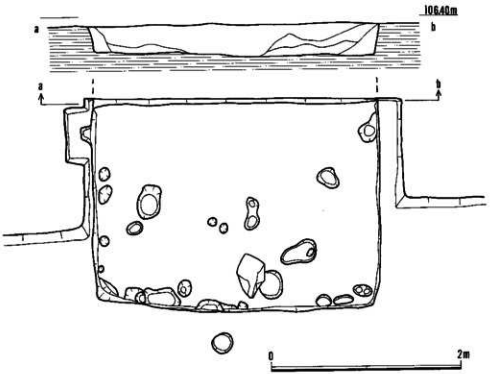
深さ0.34～0.36ｍを計り、床の壁寄りに小ピットがかなり検出されているがその機能等は不明である。また柱穴痕は認められなかった。また西側壁上部に10cm四方程度・深さ５cmの張り出しが取りついている。埋土中出土の弥生土器片は全て細片であるが、埋土の床面近くからは高杯脚部片が１点出土した（第５図14）

Ｘ区Ｄ１西方埋土上層で一括して出土した土器群は器種・個体の判別できた５個体からなる（第10図）。

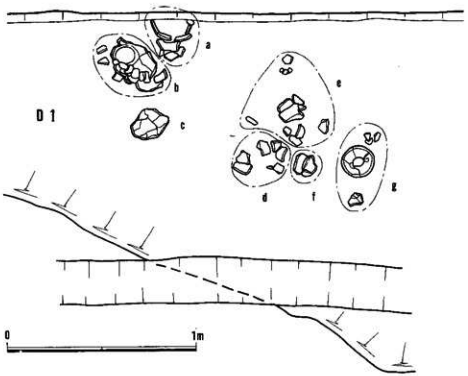
１・２（第８図のｂ）は同一個体と思われる。上方に閉き気味にやや丸味を持って伸びる口縁を備え、口縁内面は横ハケの後にナデているようである。器表は磨耗が激しいが、胴部外面はヘラ磨きかと思われる。口縁端部は不規則に刻み目が施される。また底部外周は横ナデである。２mm大以下の赤っぽい砂を多量に含む粗い胎土で、口縁端に赤色顔料痕が認められる。

３（第８図のｅ）は１・２と同様の口縁を備えるが、器壁はやや厚く端部は尖がり気味に処理される。胴部上半には細かいハケ目を施し、その下部はヘラ磨きかと思われる。胴部内面は大ざっぱにヘラ削りを行ない、上部のみ指頭によるナデが見られる。口縁部内外面はナデである。２mm大以下の砂を胎土に含み、体部は黄灰褐色を呈する。赤色顔料痕が表面にわずか残る。径は推定で3/8程度の残存である。

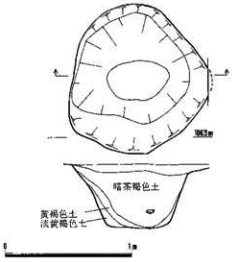
４（第８図のａ）は小さい平底を有する壺胴部で、外面はハケ目の後ナデ消しているようである。内面はヘラ削りによって器壁を薄く仕上げている。胴部中位外面に黒斑が見られる。胎土には２mm大の砂を含み、やや粗い感じがする。焼成は良というところで、乳灰褐色を呈する。残存は3/4である。



第７図　Ｘ区Ｈ１遺構図



第８図　Ｘ区Ｄ１堀上上面土器出土状況

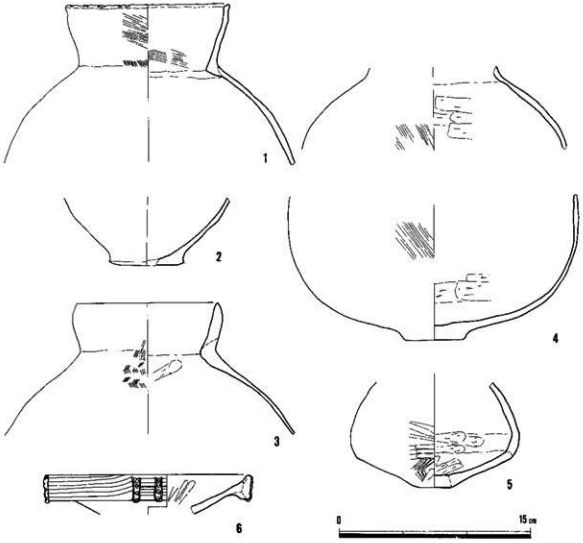


第９図　Ｘ区Ｐ１

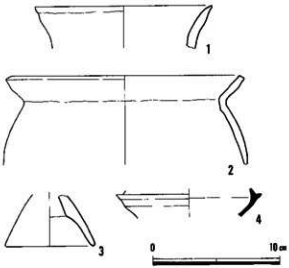
５（第８図のｆ）は小形の玉ねぎ形の壺胴部で外面はやや粗いヘラ磨き、内面底部はヘラ削りで中位には指頭によるナデが認められる。底はわずかながら平底を呈する。２㎜大以下の砂と赤砂を多量に含み、中には５㎜大の小石も含む。表面は灰褐色を呈する。

６（第８図のｇ）はやや小ぶりの器台口縁部である。口縁端部に５条のいわゆる擬凹線が施され、その上に２本１単位の表面に刻み目を付した棒状浮文が４方向に取りつく。器体内外面共ヘラ磨きかと思われ平担に仕上げている。１～３㎜大の砂を多量に含む粗い胎土であり、内外面共茶褐色を呈する。１～５が淡灰褐色系の胎土であったのに対し、６は茶褐色系で施成の具合も異なる。

土器群Ｃには壺あるいは甕の胴部破片がある。黒雲母を多



第10図　Ｘ区Ｄ１上面　一括出土遺物



第11図　X区D１上面出土遺物

量に含み内面黒色、外面茶褐色で非常に器壁がもろい。また甕底部片も出土した。

なおH１の埋土からは高杯脚部片１・山茶埦１・灰釉埦１・須恵器坏身１片が検出された。須恵器はD１上面出土のものと同様のものである。

またX区D１東半の埋土上面では弥生土器の壺・甕・脚台片各１点、須恵器坏身片１点が出土した（第11図）。

１は壺口縁部で端部は突がり気味に処理される。調整は不明だが横ナデかと思われ、１～２mm大の粗い砂を含み内外共黄灰褐色を呈する。

２はゆるく「く」字に外反する口縁をもつ甕であり、口縁はやや内弯気味である。胴部内面はヘラ削りを行なっている。粗い胎土をもち内外共乳茶褐色を呈する。残存は1/8である。

３は脚台片で外面はヘラ磨きのようであり、内面はヘラ削り後横ナデにより処理される。これも粗い土を用い、中には赤砂も混じる。残存は3/4である。

４は須恵器坏身片であり1/8程度の残存である。やや生焼けである。

４．まとめにかえて

これまで唐川遺跡として知られていながら、現在の横山集落寄りでしか明瞭な遺構は知られていなかったのが、今回の調査によって初めて現在の唐川集落付近で弥生時代の住居跡が検出された。

また唐川集落内でも先の上水道工事に伴う立会調査や昭和56年度のほ場整備で断片的にしか知られていなかった弥生時代遺物も、D１西方の上層において比較的良好な形で一括して見つかった。先のほ場整備に伴い調査された横山集落寄りのVI区住居跡出土資料とほぼ同時期の所産と考えられる弥生時代後期末のものであるが、なお所調庄内式の最古相併行の土器群との間には１ないし２型式の隔たりがあるようである。今後の県内での良好な資料の増加を待って更に検討していくことにする。

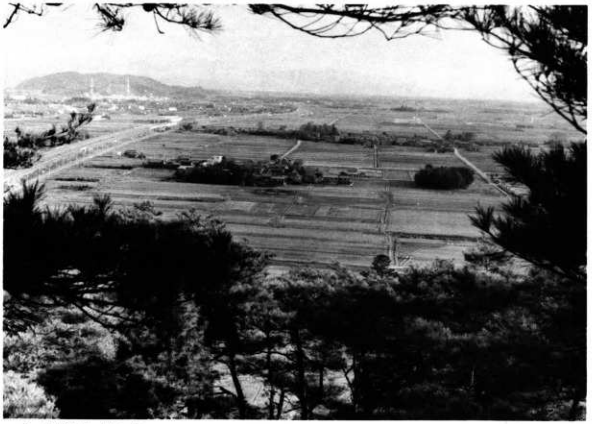
今日、唐川と横山の集落間はおよそ500mの距離があり、それぞれの集落付近でほぼ同時期である弥生時代後期後葉の集落跡が見つかった。その間、特に先年の調査時のIII区では弥生時代の明確な遺構等は検出されなかったことなどから、本来別の集落であったと考える方が自然である。現在、大字の区分により一括して唐川遺跡と呼んでいるが、今後横山集落近くはかつて弥生土器片が出土したという保育所付近まで含めて横山遺跡として唐川遺跡と分けて認識していきたい。

註

(1) 用田政晴「伊香郡高月町唐川遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅸ－１（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会）1982年

(2) 用田政晴『上月町上水道事業に伴う埋蔵文化財調査概要』Ⅱ（高月町教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会）1983年

図版一　唐川遺跡

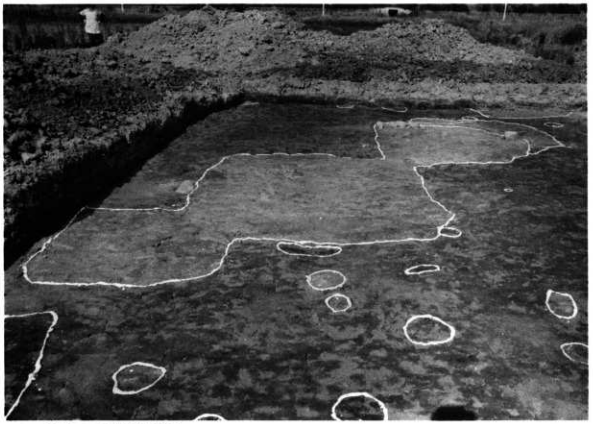


1　遺跡遠景（北より）

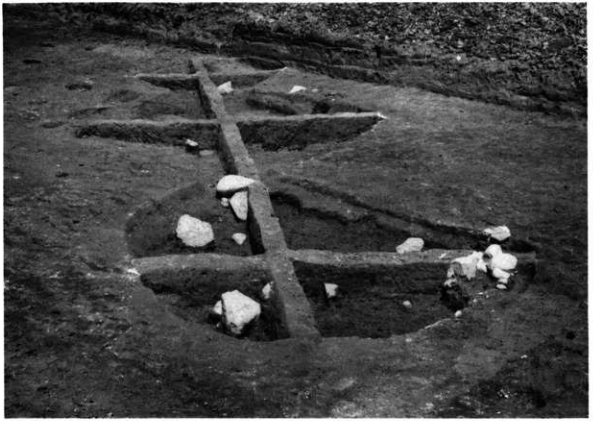
2　北陸自動車道東側トレンチ

1　Ⅶ区西半トレンチ

2　Ⅶ区東半遺構検出状況



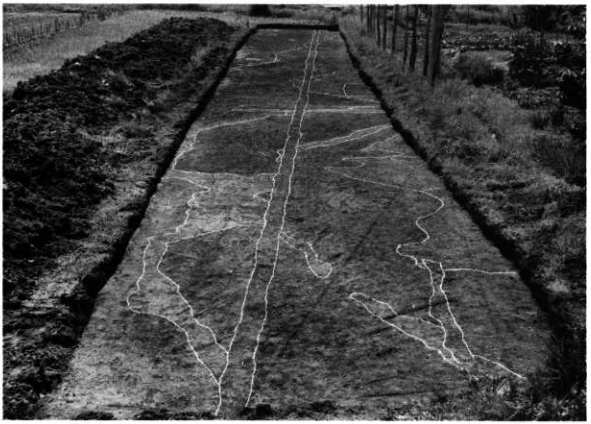
1　Ⅶ区ＢＰ１遺構検出状況



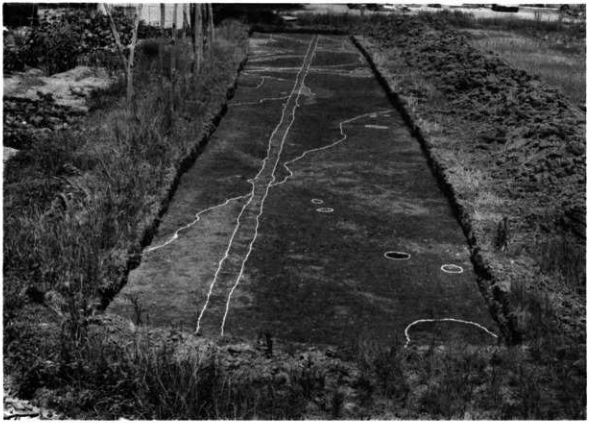
2　Ⅶ区ＢＰ１発掘状況

1　Ⅶ区ＢＰ３発掘状況

2　Ⅶ区全景（東より）



1　X区遺構検出状況（東より）



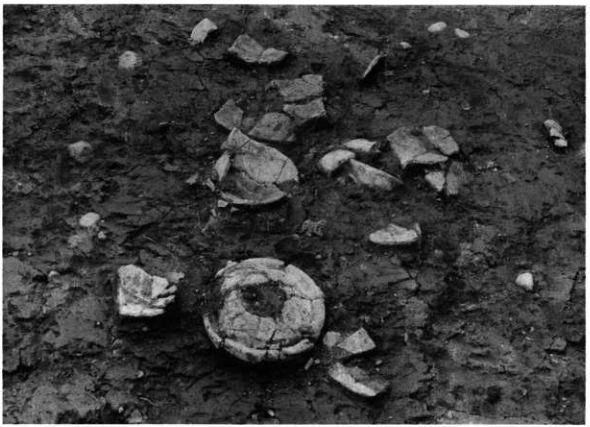
2　X区遺構検出状況（西より）

1　X区H1（南より）

2　X区H1（北より）

1　X区D１土器出土状況(1)

2　X区D１検出状況(2)



1　X区D１土器出土状況3)

2　Ⅶ区出土遺物

1　X区出土遺物1)

2　X区出土遺物2)

III 伊香郡高月町渡岸寺遺跡

Ⅲ　伊香郡高月町渡岸寺遺跡

1．はじめに

高月町内ではほとんど終了しつつあった県営ほ場整備が、昭和57年（1982年）にはその計画が国宝十一面観音像で著名な渡岸寺の西のわずかな水田にまで及んできた。そこは平安時代後葉の名残りをとどめる観音像を安置していたと思われる寺院跡の一部と思われ、従来から渡岸寺遺跡として知られてきた。また最近では、寺院東の田面中に送電線を建設中、須恵器片が出土したり、昭和57年（1982年）５月に高月町歴史民族資料館建設の適地をさぐるための試掘調査時にも、平安時代の須恵器や墨書山茶碗の混じった土壙等が検出されている。

そこで削平計画のある排水路予定部分を中心にトレンチを設定・調査を実施して遺跡の保存資料を得ることになった。

現地調査は昭和57年（1982年）10月12日に開始して11月20日に一応終了したが、翌年、排水路の計画が一部変更になったため、２月14日から２月25日まで新たな排水路計画部分（Ⅱ区Ｔ４～Ｔ６）を調査した。

調査は文化財保護課が農林部耕地建設課より予算の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会へ委託して実施した。調査の体制は次の通りである。

調査主体　滋賀県教育委員会

調査機関　（財）滋賀県文化財保護協会

調査指導　滋賀県教育委員会事務局文化部文化財保護課技師　用田政晴

調査補助員　荻野良博（滋賀大）・荻野　勉（大阪工大）・小竹森直子（岡山大）

2．遺跡の位置と環境

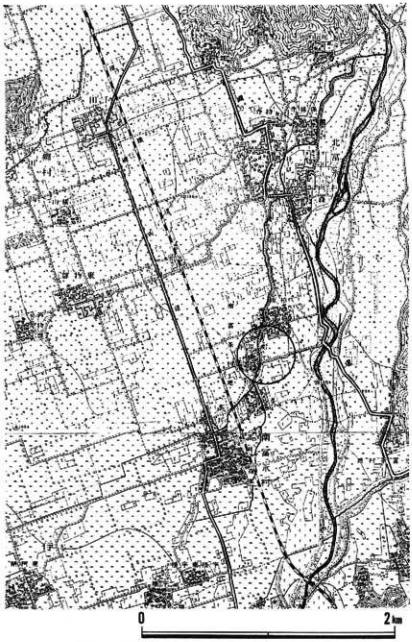
渡岸寺遺跡は伊香郡高月町大字渡岸寺に所在し、渡岸寺集落の東半を含みながら東のはずれまで含まれると思われる（第１図）。

高月町は湖北の伊香郡南部に位置し、中ほどに４km四方ほどの、西は余呉川、東は高時川によって形成された沖積平野をもつ。当該地は高時川右岸の扇状地上にあたり、先の国道365号線バイパス建設やほ場整備事業に伴い調査された柏原遺跡・井口遺跡のすぐ南にあたる。

この高時川右岸の遺跡群は、一部弥生時代中期から後期の住居跡及び土器等も出土しているが、これまでの調査によって主として古墳時代後期から平安時代にかけての大集落が営まれていたことが明らかになりつつある。また条里制に伴う地割は、渡岸寺集落の北・西には及んでいるが、東側には及んでいないようである。

貞観年間作という国宝十一面観音立像を安置する渡岸寺は、他に大日如来坐像（国重文）阿弥陀如来坐像（県文化財）がある無住・無宗派で慈雲山光恨寺と号し、現在向源寺に付属している。渡岸寺は天平８年泰澄によって建立、延暦９年に最澄が再興したが、戦国期に消失した。その後、土豪井口弾正が再建し今日に至ったという。

現在の渡岸寺付近の字名を見ると、寺前・北角・前田等のかつての寺院の存在を思わせる地名が残り、それらと現在の寺域との関係が比較的照合するため、かつての渡岸寺というものがあったとすれば、現在地とさほ



第１図　渡岸寺遺跡位置図(地図：明治26年測図)

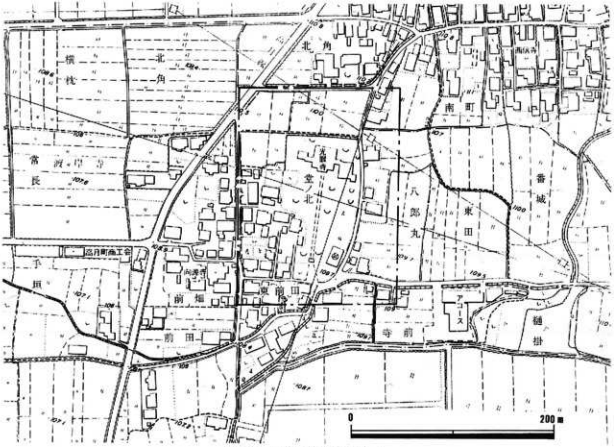
ど変らない地にあったことを思わせるのである（第２図）。

またこの地は『倭名類聚抄』にいう伊香郡柏原郷にあたり、鎌倉時代初めには青蓮院門跡大成就院領の富永荘にあたる。

３．調査の概要――遺構と遺物――

ほ場整備対象地区内においては田面の削平計画はほとんどなかったため、排水路計画部分を中心に約４×６ｍのトレンチを何ケ所かに設定した。東端の排水路予定部分をⅠ区、西の東西方向排水路部分をⅡ区、南北方向排水路部分をⅢ区と称する（第３図）。

なお、標高は標準海抜高、方向は磁北を示し、試掘溝→Ｔ、竪穴住居跡→Ｈ、掘立柱建物跡→Ｂ、溝→Ｄ、



第２図　渡崎寺遺跡周辺小字名

土壙→Ｐ、大形土壙→ＢＰ、不明土壙→Ｘの略号を用いる。

(1)　Ⅰ区

（Ｔ１・Ｔ２・Ｔ３）

Ｔ１～Ｔ３までは、25～30cmの耕土を除去すると茶褐色砂礫土が広がり、遺構は検出されなかった。しかし、土師器・須恵器・灰釉陶器は部分的に細片となって砂礫土上面から出土した。

（Ｔ４）

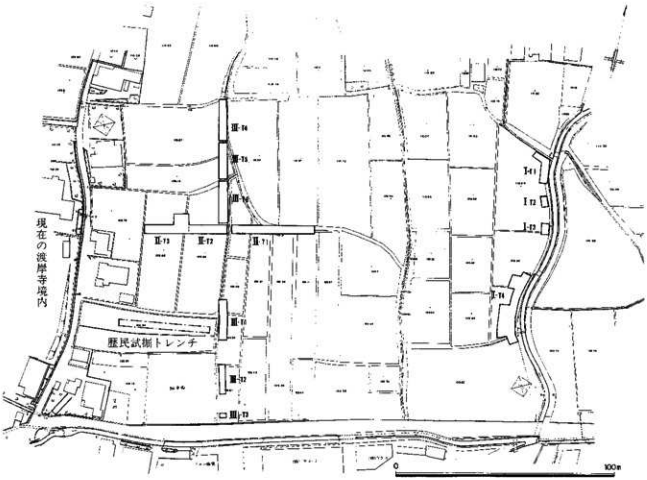
Ｔ４からＴ５にかけては、耕土下の黄褐色土層に遺構が形成されていたので、Ｔ４とＴ５をつないで後にＴ４と一括して称した。Ｔ４では一部竪穴住居跡らしい遺構が見られたため、トレンチを部分的に西に広げ精査した。

Ｔ４では竪穴住居跡４軒・大形土壙１・溝３条・ピット群等が検出されたが、溝は全て住居跡等より新しい時期のもので、埋土は全て上層の耕土からなる。なおＤ１とＨ２は重複するがＤ１が浅かったためＨ２の外郭ラインが確認できた（第４図）。

Ｈ１　2.80×2.80mの小形の方形竪穴住居跡で、上部は削平され、住居跡の深さは３～８cm程度でしか残っていない。柱穴は見られず、東壁北寄りに３個の小さな平面円形ピットが見られるのみである。北西隅に近い床面から完形の須恵器坏身が正立して１点検出された（第６図１）。

須恵器坏身は内外面とも灰色を呈し、１～３mm大の長石・石英を若干含むが堅徹に焼き上っている。

Ｈ２　6.35×6.35mの平面規模をもつ平面は方形の竪穴住居跡で、南西隅に張り出しらしいものが見られるが



第３図　渡岸寺遺跡発掘トレンチ配置図

未掘のため詳細は不明である。北東壁中ほど付近にカマドと思われる焼土塊があり、住居内南東寄りにも焼土が３～５㎝の厚さをもって1.25×0.85ｍの範囲に認められる。深さ20㎝程度の円形の主柱穴を４本備え、北西壁と南西壁の一部に壁体溝が深さ約３～５㎝・幅20㎝ほどの規模で残り、断面は逆台形である。住居跡の深さは0.4～0.5ｍを計る。カマドは1.0×1.1ｍほどの焼土塊としてのみ残り、上面には土師器甕片が炭塊に混じって散在する（第５図）。ただ灰層はほとんど見られなかった。

住居跡埋土内からは須恵器坏蓋１（第６図２）、カマド付近から土師器甕口縁部片２（第６図４・５）、床面西隅寄りから須恵器坏蓋が１点完形で出土した（第６図３）。

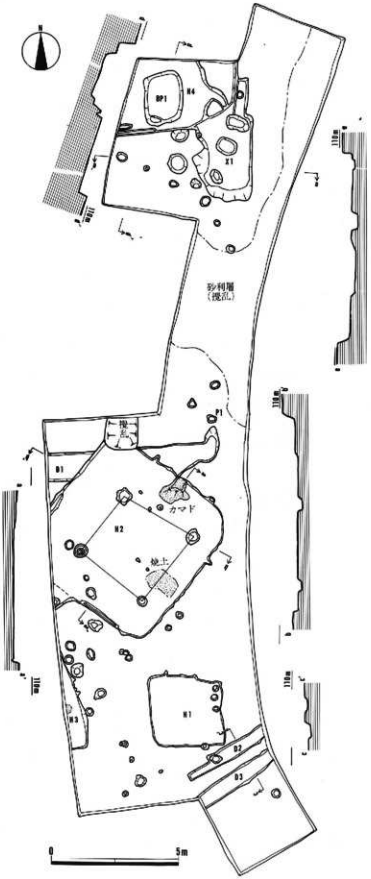
第６図２は須恵器で残存はわずか１/６であるが、退化した宝珠つまみがつく。３も須恵器で１～３㎜大の細砂をかなり含み、内外共灰白色を呈する。４・５は土師器甕の口縁部で、２㎜大以下の砂をかなり含む、５の外面にはヘケ目がわずかに残るが器壁は荒れている。

Ｈ３　Ｈ３と呼んだものはＨ２の南西部に一端だけ検出された住居跡であり、平面方形を呈するが、規模・構造等は不明である。ただ床面から焼土が一部検出された。

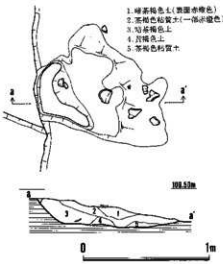
Ｈ４　Ｔ４北寄りで検出された深さ10～15cm程度の平面方形の掘り込みを一応竪穴住居跡と判断してＨ４とした。これは平面規模等は不明で、柱穴も認められず、わずかに南壁に沿って幅約15cm程度で深さ５～８cmの壁体溝らしきものが見られ、床面から炭塊が３ケ所に少量ずつ検出されたのみである。住居跡東壁と南東壁寄りは浅くテラス状に掘り残されている。住居跡中ほどに埋土上面から掘り込まれた大形土壙があり、ＢＰ１と称した。これは長径2.0m・短径1.55mの楕円形ないし隅丸方形で深さ60cmを計り、底は比較的平らである。埋土上層に10～20cmの礫が含まれ、下層埋土には土師器・須恵器・灰釉陶器等の細片が残存していた（第６図10～14）。

第６図７・８はＨ４埋土出土で、共に細片となり１mm大以下の砂を少し含み焼成は良好である。８の外面にわずかに自然釉がかかる。10～14はＢＰ１埋土内から出土したもので10・13は須恵器、11・12は山茶埴、14は土師質である。全て細片で11・12の胎土は１mm以下の砂をわずかに含むが、きめ細かい精良な土である。

Ｘ１　Ｘ１と呼んだのは、Ｈ４に切られた大形で浅い落ち込みで、性格等は不明であるが底に４個の



第４図　Ｉ区Ｔ４遺構図



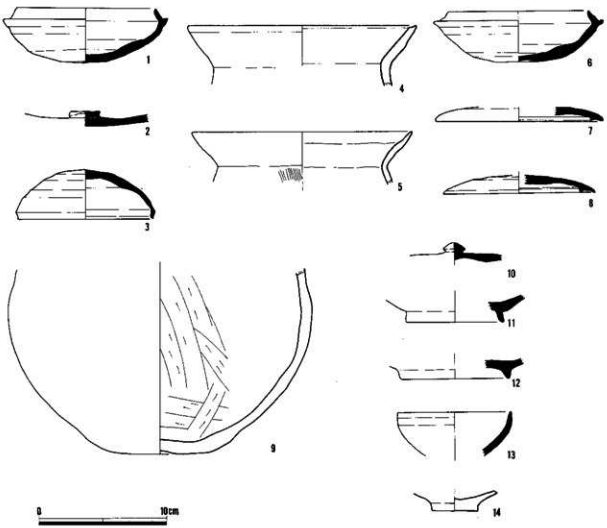
第5図　H2カマド

ピットが認められた。西側の落ち込み部下方で厚手の土師器甕胴部がおしつぶされた状況で検出された（第6図9）。これは5㎜大の石英・長石粒を含む粗い土からなり、外面は黄褐色、内面は明褐色を呈する。外面調整は不明だがかなり凹凸が見られ、底部は上げ底気味の平底である。

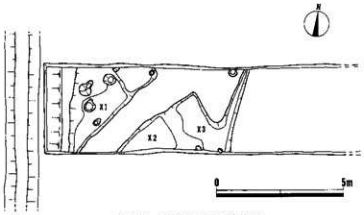
また、H2の北方にある径35cmのピットP1の底から須恵器坏身が少し浮いて正立して見つかった（第6図6）。このピットの深さは約25cmを計る。須恵器外面は自然釉が付着しているため緑がかかった灰白色、内面は明灰白色を呈し、焼成は良好である。

(2)　Ⅱ区

Ⅱ区ではT1～T3までの3つのトレンチを設定した。ここ



第6図　Ⅰ区T4出土遺物

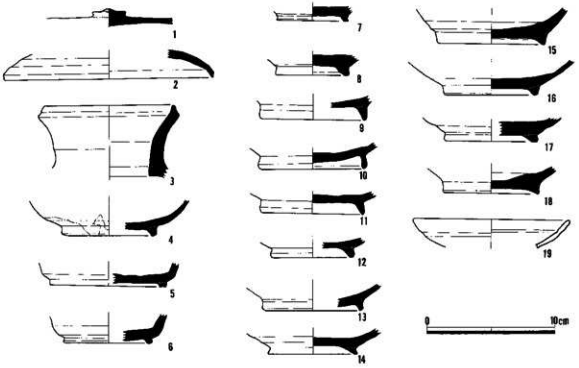


第７図　Ⅱ区Ｔ１西部遺構図

では重機により厚さ25～30cmの耕土を除去すると、Ｔ１の東半は茶褐色砂礫土層が広がり、遺構は見られなかったがＴ１の西半からＴ３にかけては黄褐色土層に南北に走る溝４条・竪穴住居跡１・確実な掘立柱建物跡１の他ピット群が認められた。

（Ｔ１）

Ｔ１では、性格不明の深さ20cmほどの落ち込みが３ケ所認められ(第７図)、



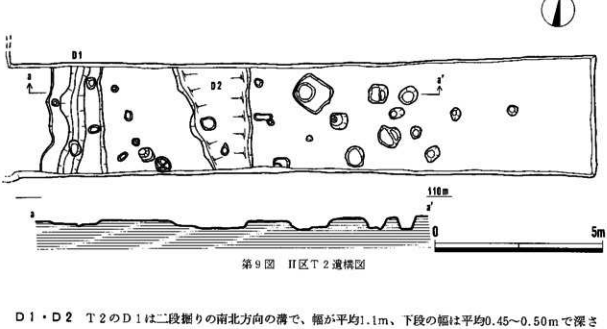
第８図　Ⅱ区Ｔ１出土遺物

それぞれＸ１～Ｘ３と称した。これらの上には茶褐色砂礫土からなる８世紀初～12世紀ごろまでの遺物包含層がかぶっており、須恵器・灰釉陶器・山茶埦・土師器片が出土した（第８図)。

１～８は須恵器、９～14は灰釉陶器、15～18は山茶埦、19は土師器である。１・２は坏蓋で、１は完周するが、２は1/8の残存でしかない。３に一部残る胴部内面は同心円文タタキが認められ、頸部内面には自然釉がかかる。４～８はいずれも細片で、４は淡緑色の釉が付着する。山茶埦も破片であり、15・16・17も内面に自然釉が点々とついており、16・17・18には高台底にモミ痕が残存し、16・18の体部底は糸切り痕が認められる。灰釉陶器・山茶埦共灰白色の比較的精良な胎土を用いている。19の土師器皿の内面中ほどに、１本の条線が認められる。残存1/12破片でしかない。

（Ｔ２）

Ｔ２とＴ３は本来別であったが、トレンチを最終的につないだ（第９図)。



第９図　Ⅱ区Ｔ２遺構図

Ｄ１・Ｄ２　Ｔ２のＤ１は二段掘りの南北方向の溝で、幅が平均1.1m、下段の幅は平均0.45～0.50mで深さは最も深いところで約0.20mである。Ｄ２は北に行くにつれて広がり、底はやや舟底状を呈する。幅は広いところで2.30m、狭い南端で1.12mを計り、深さは0.15m程度である。Ｄ２からは、須恵器・土師器・灰釉陶器片および鞴の木口の羽口片が１点検出された（第11図28）。Ｔ２・Ｔ３では掘立柱建物になると思われる土壙がかなり見られるが、トレンチ幅が狭いためほとんど復元できなかった。

第11図１の須恵器坏身底部はＤ１、２～５の須恵器及び６の土師器はＤ２の埋土中から破片となって出土した。また７の土師器はＰ２、８・９はＰ３、10はＰ４、11の灰釉陶器片はＰ５、12はＰ15の埋土中から検出された。６の甕口縁は残存が1/20程度しかなく、内面は横ハケが認められるが、外面調整はナデかと思われる。１㎜大の砂を含む胎土からなる。10はいわゆる轆轤土師と思われるが、底面の糸切り痕は明瞭でない。（Ｔ３）

Ｄ１・Ｄ２　Ｔ３でも平行して走る溝が２条見つかり、西端のＤ１は平均幅0.85m、深さは0.15～0.25mを計る（第10図）。溝内から硬質の暗灰色を呈する石材からなる砥石状のものが見つかった。四周に平坦面らしきものを備えるが、面はあまり砥がれておらず用途不明石製品としておく（第11図13）。

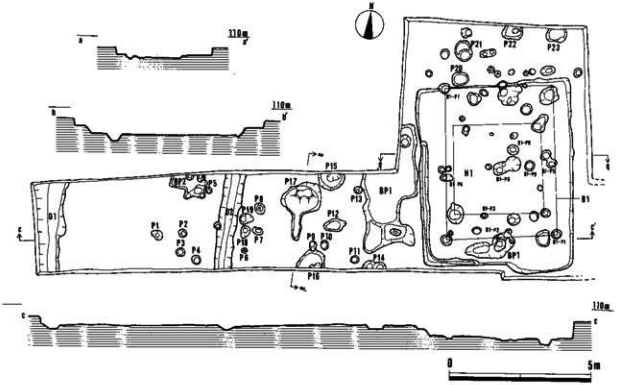
Ｄ２は平均幅0.70m・深さ0.15m程度で底は舟底状をなす。Ｄ１・Ｄ２共ほぼ南北に走る。またＤ１の東端からＤ２の西端までの距離はおよそ6.0mを計る。

第11図14～18・27・28はＤ２埋土内出土で、14は須恵器・15は灰釉陶器・16～18・27は土師質である。18は鉢の口縁部かと思われ、口縁端部は外面へ折り返している。外面はヨコナデ、内面には指頭圧痕が認められ暗灰褐色を呈する。１㎜大の砂をかなり含み1/6の残存である。27は土師器で表面がかなり磨耗しているが、胎土はきめ細かく淡黄褐色を呈する。

Ｐ17　Ｔ３中ほどにある平面が柄鏡状を呈する土壙で、深さ0.10～0.15mを計り円形部の底面が一部盛り上り鳥状を呈する。円形部底面から須恵器大甕片・坏身片それに溝状部底面から高坏の脚部片（第11図25）が１点ずつ出土した。内面は横方向のヘラ削り、外面も面取り状に削り、胎土はやや粗い。

またＰ４埋土内から図示し得なかったが緑釉陶器の小片が土師器・須恵器片に混って出土した。

他の遺物として、第11図19の須恵器はＢＰ１、20はＰ１、21の須恵器、22の土師器皿、24の須恵器は後述す



第10図　Ⅱ区Ｔ３遺構図

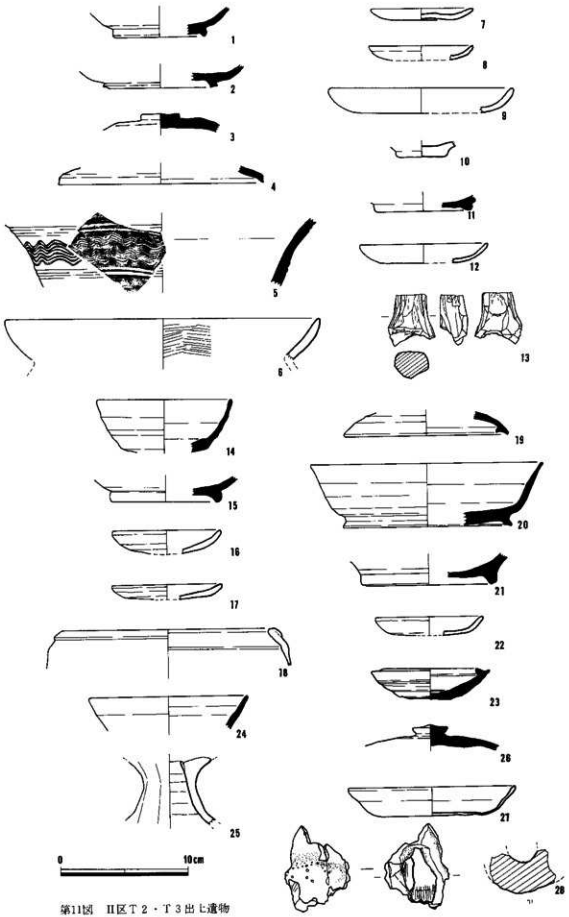
るＨ１と重複している掘立柱建物跡のごとくＨ１埋土上面から掘り込んでいるピットの出土品で、それぞれＢ１－Ｐ３、Ｂ１－Ｐ５、Ｂ１－Ｐ９から検出された。また26はＰ20、21・23の須恵器は残存1/2で２～３㎝大の長石粒を中心にかなり砂を含む。26の外面には自然釉がかかり、やや粗い胎土からなる。

Ｈ１・Ｂ１　Ｔ３のＨ１は6.30×5.40mを計る平面長方形の竪穴住居跡で、南壁の東半は70㎝ほど南に張り出す形をなす。これとほぼ重複するように発掘範囲内では２×２間の掘立柱建物跡がＨ１埋土上面から掘り込まれて遺存していた。

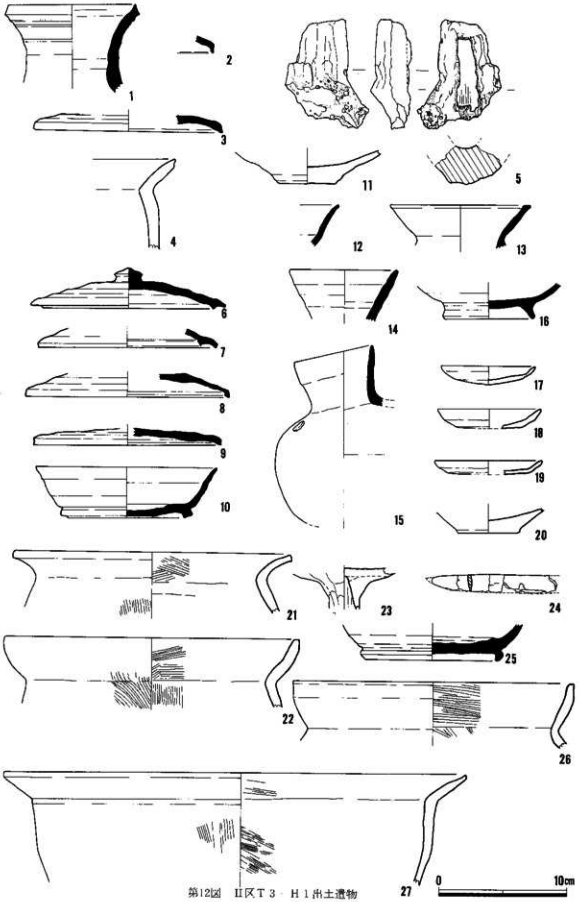
Ｈ１は西壁と南壁の一部に幅10～20㎝・深さ５～８㎝の壁体溝を残し、４本柱をもつと思われる。また南壁近くに床面から掘り込まれたＢＰ１と称した土壙を備える。1.65×1.35mほどの楕円形の張り出しを付設した形を呈し、深さ40～65㎝を計り底はほぼ平らである。埋土はグライ化した粘土質の土からなる。その埋土中位には人頭大の炭塊および灰塊が混じり、須恵器甕片１・土師器甕片１そして鞴の木呂の羽口が１点見つかった（第12図５）。

Ｂ１の建物方向はＮ－8°－Ｗを示し、柱穴の掘り方径は大きいもので40㎝ほどしかない。桁行3.90m・桁行5.35mを計り床面積は約20.86㎡である。なおBP１の東半に掘り込まれたピット群は埋土上面のＢ１に伴うものと思われる。

Ｈ１の床面から掘り込まれたＢＰ１の埋土中からは、第12図１の須恵器・４の土師器甕口縁片・５の鞴羽口片が出土した。１は胎土がやや粗いが焼成は良好で1/3の残存である。４の甕の外面は口縁端を除き縦ハケ、胴部内面は横ハケあるいは斜めハケが認められ、胎土も１㎜大以下の砂を含み良好である。５の羽口片は図でいう外面上部はナデで成形を施した痕跡が認められ、下半にはガラス質の融解物が付着しサビ状のものもわずかに認められる。外面は灰白色の地に黒褐色が部分的に見られ、内面も黄褐色地に一部黒褐色化したところが



第11図　Ⅱ区Ｔ２・Ｔ３出土遺物



第12図　Ⅱ区Ｔ３・Ｈ１出土遺物

ある。細かい胎土をもち、内径はおよそ2.5cmを計る。

2・3はH1の柱穴と思われるピット内埋土から出土したもので、6～24は全て住居内埋土からの出土品である。また11と25～27は床面東南部張り出し付近から検出されたものである。

6～10、12～15は須恵器である。6の残存は1/2、7は1/8、8は1/6、9は1/6の破片で、10は2/3程度残る。胎土はすべて1～3mm大の砂を含み少し粗い感じがするもので、自然釉の付着が多く認められる。15の平瓶は1/4程度の残存であり、円形浮文付近に自然釉が部分的に認められる。16は灰釉陶器で2mm大の砂を胎土に含み明灰白色を呈する。17～19は土師器の小皿でいずれも完形ではない。表面はすべてかなり磨耗している。11と20はいわゆる轆轤土師の底部で、粘質の強い精良な胎土からなり淡黄褐色を呈するが、調整等は不明である。20の底部には回転糸切り痕がわずかに残る。

21・22・26は土師器甕の口縁部で、21の口縁端部下端は尖って垂下気味に成形されている。口縁内面は斜めハケ・外面横ナデ、胴部外面には縦ハケが認められ、内面の一部に粘土の継ぎ目が判る。22の内外面にはハケ目が残存し、口縁部外面のみ横ナデによって消されている。また26の内面にはハケ目が残るが外面は横ナデである。この3点共1mm大以下の砂粒をかなり含む土からなり、淡黄褐色ないし淡茶褐色を呈する。23は高坏の一部で坏部内面は磨かれており、脚部外面は指圧により調整されている。1mm大以下の長石粒を中心とする砂を含み、暗赤褐色の胎土をもつ。24の鉄器は刀子の一部と思われるが、これもH1の埋土中から出土した。現存長9.8cm・刃部横幅1.5cmを計る。27の土師質の鉢は内外共ハケメ調整が認められ、外面にはススが付着している。1～2mm大の砂を含む粘質の胎土をもち、残存は1/12で径は推定である。

25の須恵器坏身片は1～2mm大の砂をかなり含む土からなり高台は内面に向って屈曲する。

(3) Ⅲ区

（T1・T2・T3）

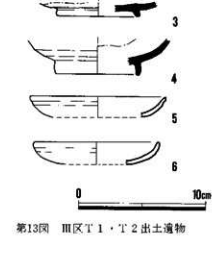
T1～T3は現水田の溝と重複するように設定したが、現代の溝以外の遺構としてT2で4つの小ピットが見つかったのみで、遺物としては溝埋土内を中心に須恵器・土師器・灰釉陶器片が少量出土した。

第13図1～4はT1、5・6はT2のP1と称した小ピット内から検出されたものである。1・2は須恵器で共に1mm大以下の砂を含む胎土からなり、焼成は良好な小片である。3・4は灰釉陶器片で径はいずれも推定である。共にきめ細かい胎土で灰白色を呈する。5・6は土師質で淡褐色ないし淡赤褐色を呈し、焼成は普通である。5の口縁部近く外面には凹線状の屈曲部を備える。

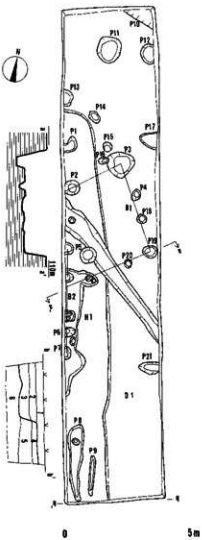
（T4・T5・T6）

T4～T5はⅡ区T2の東端から北に伸びる排水路予定部分にあたり、北からT4・T5・T6と称した。T4・T5はT1～T3と同様であったが、T6では一部溝と掘立柱建物跡が2棟分かった。トレンチ東半では現代の溝と重複するように深さ1.40mを計り、底が平らなD1が南北方向にあり、北端では西方向に張り出しながら伸びている。

その埋土の青灰色粘土上面から掘り込まれて掘立柱建物B1



第13図　Ⅲ区T1・T2出土遺物



第14図　Ⅲ区Ｔ６遺構図

が検出され、南西方向に伸びるようである。梁行7.30mを計る。またＢ２がトレンチ西端ラインに沿って見つかり、これも西方向に広がる建物跡と思われ、１つの柱穴掘り方内の底から根固めの偏平な人頭大の河原石が２個検出された(第14図)。

第15図はＴ５・Ｔ６の出土品である。１～15はＴ５の溝埋土内から出土したもので、１は土師質、２～９は須恵器、10～12は灰釉陶器、13は白磁、14は陶器、15は平瓦片である。

１は土師質できめ細かい胎土をもち、須恵器の生焼けではないようである。須恵器の坏蓋と坏身片は全て小片で１㎜大以下の砂をかなり含む胎土で、焼成はおおむね良好である。９の甕口縁部は横ナデ、胴部内面に同心円文が見られる。10・11・12の灰釉陶器は胎土はきめ細かく灰白色を呈する。13の白磁塊はきめ細かい灰白色の胎土をもち残存は1/12程度である。14は美濃焼の擂鉢底部で条線はかなり細かくつまっている。１㎜大の砂を含み内外共茶褐色を呈する。15の平瓦片凸面は縄目タタキが部分的に見られ、タタキ後ナデ消しているようである。

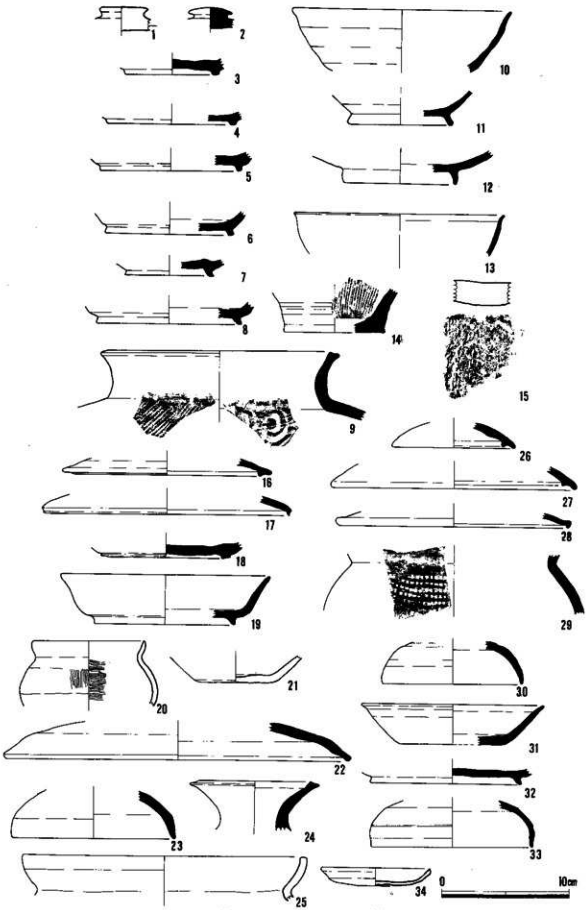
16～18の須恵器はＴ６のＰ１から出土したものでいずれも小片である。16は青灰色を呈し、胎土のきめも細かい。17・18は１㎜大の砂が目立つ。19の坏身片Ｐは３出土で残存は1/3、20～22はＰ４出土で20と21は土師器で、20の胴部にはヘケ目が残存し、残りは1/4程度である。24は大形の蓋であるが、残存1/12で径は推定である。Ｐ７出土の23、Ｐ９出土の24は共に須恵器で24の内面には淡緑色の自然釉が点々と付着する。25～27はＰ13からの出土品で、26は焼成のあまい土師器甕、26・27は胎土に１㎜大の砂を含む須恵器坏蓋でいずれも小片である。

29～32はＤ１埋土内出土で、全て須恵器小片である。31の胎土はやや粗い。33の須恵器蓋、34の土師質小皿はＴ６付近での表採品で、33の天井部にはややひずみが見られるが、内外共灰白色を呈し、焼成は良好である。34の残存は1/3で乳褐色を呈し、１㎜大以下の砂を少し含む精良な胎土である。

４．まとめにかえて

わずかな調査面積ではあったが、最近まで継続的に調査が行なわれてきた高時川右岸崖状地における井口遺跡・柏原遺跡等と同様に、渡岸寺遺跡も古墳時代から平安時代末まで展開した集落跡であることが判ってきた。

調査対象地東部のⅠ区竪穴住居跡群は６世紀末～７世紀前半にかけてのものであり、Ｈ４も７世紀後半には埋められている。そして、８世紀を相前後する頃になると西側に広がりⅡ区の竪穴住居を設けるようになる。９世紀代の明確な遺構は見られないが、遺物は出土し、10世紀後半～11世紀代にかけて掘立柱建物が築かれたようである。なお溝の埋土には８世紀代の遺物から、一部13世紀初頭の土師器皿までが混じっており、これ以降遺跡の明瞭な痕跡は認められなくなる。



第15図　Ⅲ区Ｔ５・Ｔ６出土遺物

現在十一面観音像を安置する渡岸寺（向源寺）の旧寺域を示すかと思われる溝がⅡ区において見つかり、これらはこの南約40mで設けた高月町歴史民俗資料館建設の適地を探る試掘トレンチでも検出された幅約1.8mの溝に位置的には対応するようである。寺院関係の「寺前」・「北角」・「前田」等の小字名の分布からこれらの溝を寺域の東限とし、現況の道・溝等の地形を考え合わせると第2図の如く二町×一町半の寺域推定がとりあえずのところ可能になる。

今回の調査ではⅢ区で瓦片が3点見つかったのみで、寺院を示す確実な痕跡は得られなかったが、当該地は古代の広大な高時川右岸扇状地上遺跡群のほぼ南端にあたり、北国脇往還沿いに北上してくると伊香郡内に入ってすぐ西側にあり、要衝の地であったことはまちがいない。

註

(1) 林　純『国道365号線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－高月町柏原遺跡Ⅰ－』　1980年

(2) 田中勝弘「高月町井口遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』　Ⅳ－Ⅱ（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会）　1977年

田中勝弘「高月町井口遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』　Ⅴ（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会）　1978年

田中勝弘・林　純『国道365号線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－高月町井口遺跡－』（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会）　1981年

用田政晴「電話線埋設に伴う高月町井口遺跡調査概要」『滋賀文化財だより』　№55　1981年

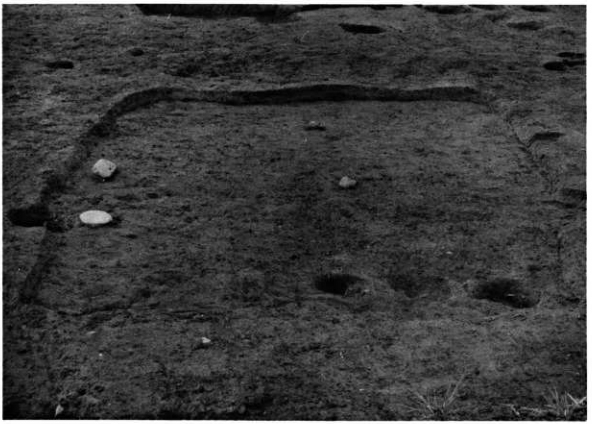
用田政晴『高月町上水道事業に伴う埋蔵文化財調査概要』Ⅰ（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会）1982年など。

(3) 池辺　彊『和名類聚抄郡郷里駅名考證』　1981年

(4) 清水正健編『荘園志料』上巻　1971年

1　遺跡近景（東より）

2　Ⅰ区全景（南より）



1　I区H1

2　I区H2

1　I区H２カマド付近

2　I区P１土器出土状況

1　Ⅱ区T3－H1・B1（南より）

2　Ⅱ区T3－H1・B1（北より）

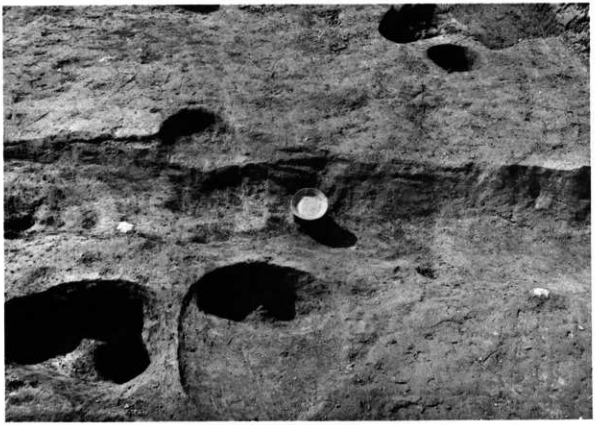
1　Ⅱ区T3－H1－BP1

2　Ⅱ区T3西半（南東より）

1　Ⅱ区Ｔ３（西より）

2　Ⅱ区Ｔ３－９－17

1　Ⅱ区T３－D２土器出土状況



2　同　上

1　Ⅲ区Ｔ６（南より）

2　Ⅲ区Ｔ６（北より）

1　Ⅲ区T6根固め石

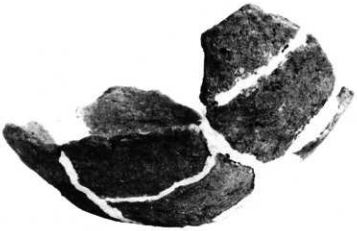
2　同　上

1

2

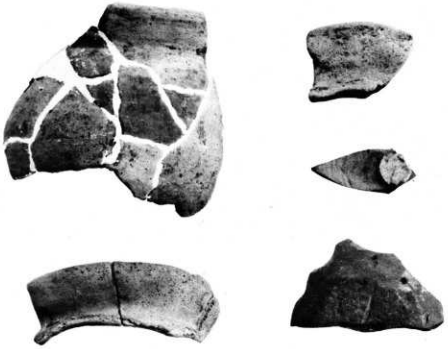
3

4



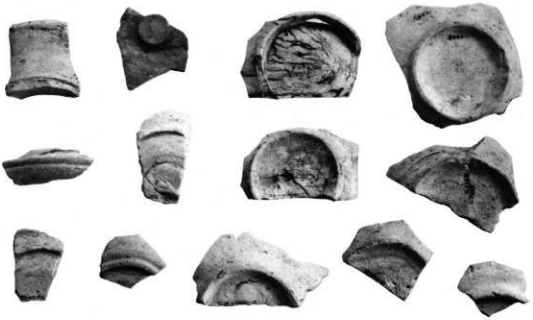
5

1　Ⅰ区H１出土遺物　2　Ⅰ区H２出土遺物　3　Ⅰ区H４出土遺物　4　Ⅰ区P１出土遺物
5　Ⅰ区X１出土遺物



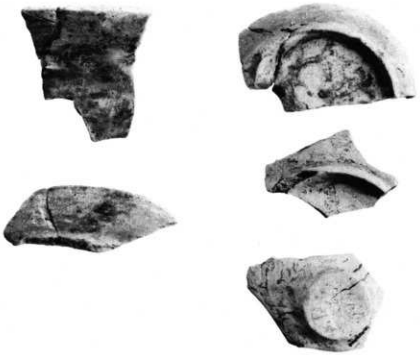
1　Ⅰ区H２出土遺物

2　Ⅰ区X１－BP１出土遺物



1　Ⅱ区Ｔ１出土遺物

2　Ⅱ区Ｔ２－Ｄ２埋土出土遺物



1　Ⅱ区Ｔ３－Ｈ１出土遺物

2　Ⅱ区Ｔ３－Ｈ１埋土出土遺物

1　Ⅲ区Ｔ３－Ｐ２出土遺物

2　Ⅱ区Ｔ３－Ｐ１出土遺物

3　Ⅱ区Ｔ３－Ｐ７出土遺物

昭和58年3月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告Ⅹ－2

編集　滋賀県教育委員会

発行　滋賀県教育委員会

財団法人　滋賀県文化財保護協会

印刷　有限会社　真陽社

京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL　(075)351－6034